（別紙２）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名　鄭　恩禎

イントネーションは，意味との関わりを解明する方法が未確立であり，文の音調全体の精密な観察も難しく，その研究は遅れている。本論文は，若い世代の日本語東京方言の疑問文を対象に，話し手の意図と聞き手の知覚を組み合わせる新手法を用い，併せて音響分析で精密化をはかることによってこの問題にアプローチしたものである。

具体的には，３種の疑問文型と４つの発話意図を組み合わせた文例を用意する。文型は(A)単純疑問文「やる？」，(B)疑問詞疑問文「なにやる？」，(C)不定詞疑問文「なにかやる？」，発話意図は(1)「判定要求」(YES-NO 疑問)，(2)「情報要求」(WH 疑問)，(3)「確認」(問い返し)，(4)「不満」で，それらの実際に可能な組み合わせは８種類見つかり，対比のために平叙文を加えた計９つの文が考察の対象となった。

まず，発話提供者の音声を録音し，次の８つの音響要因に着目して音響分析を行う。①文の出だしのピッチの値(S)，②文の終わりのピッチの値(F)，③文の後半部における出だしのピッチの値(s)，④文の後半部における，終わりと出だしのピッチの値の差(F-s または F-S)，⑤文の前半部における終わりのピッチの値(f)，⑥文の前半部のピッチの最高値(P)，⑦文中のピッチの最低値(L)，⑧発話持続時間(D，必要に応じて前半は d1，後半は d2)。そして，９つの文のイントネーションパターンが相互に区別されていることを明らかにした。

次に，その音響データの各値を入れ替えた合成音を作り，６名を対象に知覚実験を行った結果，話し手の発話意図は聞き手も聞き分けており，単純疑問文では「F-S」と「D」が，疑問詞疑問文と不定詞疑問文では「F-s」と「d2」が弁別特徴として働いていることを明らかにした。ただし，疑問詞疑問文の「情報要求」と「確認」の区別だけは聞き手に伝わらず，ともに情報要求と受け取られた。もとの録音音声による知覚実験でも同じことが確認された。「情報要求」(WH 疑問)と取られる理由として，疑問詞疑問文は疑問詞(WH)に対する答えを要求するのが最も自然であり，焦点のある疑問詞のピッチが最高値になって文末の上昇は抑えられるために「確認」(問い返し)とは受けとめられにくい，という解釈を施している。

実験に用いた例文の中に東京方言として自然とは言えないものが含まれていること；８つの音響要因が完全にコントロールしきれておらず，弁別的音響要因として提唱された「F-S」ないし「F-s」にはさらに別の要因がからんでいる可能性があるなどの問題点は残る。しかしながら，先行研究が研究者の主観的観察に依っているか，１つないし２つの文を少数の要因で音響分析している現状を考えると，鄭氏の扱った範囲はそれを大きく超えているし，特に新たに聞き手の観点を取り入れて話し手の意図と聞き手の受け取りが一致しない例があることを明らかにし，その不一致の原因まで解明した点は十分に評価できる。その意味で，今後のイントネーション研究発展の礎となる研究と見て，本審査委員会は本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。